

(当センター事務局が公表資料をもとに作成)

国立環境研究所発行「IPCC 第 5 次評価報告書のポイントを読む」 (要約パート 1)

【マメ知識 1】 「緩和策」と「適応策」

- △ 地球温暖化対策には、温室効果ガス排出量を削減（または吸収量増加）する「緩和策」、自然生態系や社会経済システム調整により温暖化の悪影響を軽減（または好影響を増長）する「適応策」に大別できます。
- △ 緩和策の例として、京都議定書のような国際ルールや省エネルギーなどが、また適応策の例として、海面上昇に対する堤防設置やクールビズなどが相当します。緩和策の波及効果は広域的、適応策は地域限定的です。
- △ 最大限の緩和策を行っても、過去排出の温室効果ガスの蓄積があり、気候変化は避けられず、それに対して取り得る対策は適応策に限られます。双方とも温暖化対策として不可欠です。

【マメ知識 2】 「シナリオ」

- △ シナリオとは将来起こり得る状況を想定した見通しです。その作成方法として、現時点から将来を予測する方法（前進型）、将来時点の目標設定から現時点までの道筋を予測する方法（バックキャスティング型）があります。
- △ IPCC 第 5 次評価報告書では、約 1,200 のシナリオが集計され、将来の温暖化予測や対策が評価されています。このうち、温暖化対策が取られないことを前提にするベースラインシナリオが約 300 通り、目標設定とそのための削減量・経済影響推計を前提にする緩和シナリオが約 900 通りです。
- △ IPCC 第 5 次評価報告書では、2100 年時点の大気中の温室効果ガス濃度をもとに、4 通りのシナリオが開発されています。2°C 目標達成の可能性が高いシナリオ、ベースラインシナリオ、その中間に位置するシナリオです。また、一時的に目標濃度を超えるオーバーシュートシナリオが整理されたのも特徴です。

以上